

[特別活動]

「縦」, 「横」, 「斜め」のつながりを意識した係活動の試み

— 学級代表を中核とし, 係同士がつながる組織づくりを目指して —

黒田 隆夫*

1 はじめに

近年, 子どもたちの社会性の育成が叫ばれる中, 学校現場でも人間関係の希薄さや消極的, 受動的な態度が問題視されている。国連児童基金 (ユニセフ) の調査によると, 「孤独を感じる」と答えた日本の15歳児の割合は29.8%と先進国の中でもずば抜けて高い値を示している。これは, 学校での集団活動の中で人間関係を上手く築くことができず, 結果として孤独を感じてしまうことにつながっているのではないだろうか。

子どもたちが学校生活で日常的に人とかかわって活動するものの一つに係や委員会などの特別活動がある。学習指導要領解説特別活動編では, 望ましい集団活動の在り方について一人一人が役割を果たし, その役割を全員が共通に理解し, 自分の役割や責任を果たすとともに, 活動の目標について振り返り, 生かすことができることを重視している。

小学校で行われる係活動は, 発達段階に合わせ, 低学年の当番的な活動から, 中学年では創意工夫を生かし, 高学年で自分のよさを生かせる継続的な活動ができるようにすることをめやすとしている。また, 児童会活動の運営は高学年が主となり, 「自発的・自治的な活動であり, 児童による活動計画の作成が必要である」としている。しかし, これまでの委員会活動を振り返ると, 何をしてよいか分からず, 自発的な活動を行うことができない子どもが多くみられ, 教師が一から指導助言を行う結果となることが多く見られた。これは, 主体的に取り組むことを主とした活動経験が少ないことが原因ではないかと考えられる。

齊藤 (2010) によれば, 子どもの自主性を育てるためには, 活動の取組を十分に見取ることが大切であるとしている。係活動を通して自己の役割や責任を果たす態度, 互いのよさを認め合って協力する態度を育て, 高学年の委員会活動や中・高等学校の生徒会活動, そして社会での集団活動につながるような組織作りを行うことで, 子どもたちの良好な人間関係を築き, 望ましい集団生活を送ることができるのではないかと考えた。

そこで, 本研究では, 特に中・高学年の係活動において, 子ども達が自主的な運営で係活動を行い, 人と人とが信頼関係で結ばれるようなつながりのもてる組織の在り方について実践を行うことにした。

2 児童の実態

当校は, 上越市の中心部に位置する全校児童800名あまりの大規模校である。1クラス40名近い児童が在籍する中, それぞれの学級が特色をもって活動をすすめている。また, 在籍児童が進学する中学校も市内有数の大規模校であり, 個性豊かな取組がなされている。

児童会活動は13の委員会から構成され, それぞれの役割をもって取り組んでいる。しかし, 児童会運営にあたっては, 個々の委員会に任されていることが多く, 独立的な活動にとどまっている。係活動も同様で, 担当教師の裁量にゆだねられている気風もあり, 自治的な取組を主とする活動としては課題が残る。社会性の育成を考えたとき, 係活動は中学・高等学校の生徒会, また将来大人になった時の職場の組織にもつながる活動でありたい。そのために, 子どもたちが係活動に対して自主的・自律的に関わることができるような組織であることが必要ではないかと考えた。

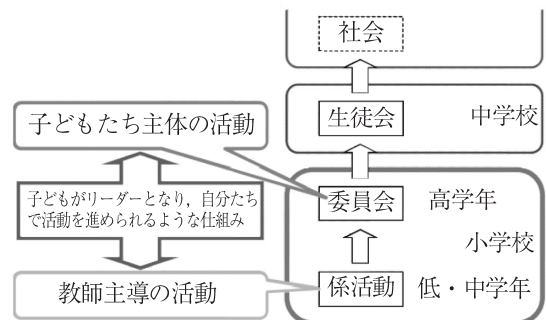


図1 発達段階における係活動の役割

* 上越市立春日小学校

3 研究の目的

本研究では、中・高学年における係活動の組織・運営を通して、子どもたちが自主的な活動として運営できるような係活動の在り方を探る。また、係同士が連携し、支え合い、認め合うことで、よりよい人間関係を形成していきけるような組織作りについても求めていく。そして、自分の役割に対して責任をもち、人と人とのつながりを意識できるような活動にしていきたいと考えた。そのために、以下の4つの組織を作ることが必要だと考えた。

- (1) 教師ではなく子どもがリーダーとなって運営することで、「縦」がにつながる組織
- (2) 係同士が密接に関わり、互いに認め合い、刺激をもらえるような「横」の組織
- (3) 係の枠を超えて様々な人が評価し、高め合う「斜め」の組織
- (4) 年間を通して、活動の評価・改善を行い、よさを「引き継ぐ」組織

4 研究の方法

研究の目的に迫ることができるような組織作りを以下の方法で行い、その有効性を探ることにした。

(1) 係のリーダーのリーダーである学級代表と係を補佐するアルバイト

それぞれの係で活動している内容を常に把握し、教師ではなく子どもの視線で管理・運営することができるように、係活動を取り仕切る役目を学級代表が行うことにした。学級代表は、係が行うイベントをスケジュール化し、カレンダーに記入したり、係活動の時間に他の係の様子を見て助言や補助をしたりする。係のリーダーは、定期的に学級代表と連絡をとり、活動の悩みや取組の状況などを話すことができるようにした。

アルバイトは、主として係以外に所属する子どもが担当する。自分の受け持つ仕事が終わると、支障のない範囲で別の係の手伝いを行うことができるようにした。あくまで補助的な役目であるため、活動の中心となる係のリーダーや学級代表はアルバイトをすることができないようにした。

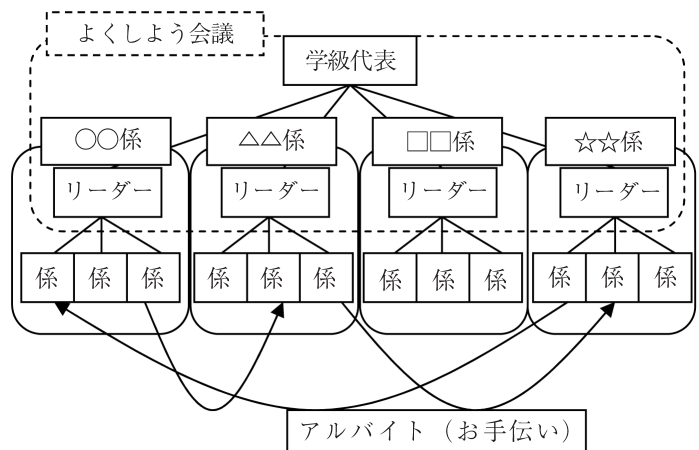


図2 係活動の組織図とリーダー会議の構成

(2) 「リーダー会議」の実施

係同士が交流し、支えあって活動を進めることができるように、定期的に係のリーダー同士が集まり、話し合いを行うことにした。「クラスをもっとよくしよう会議」と名付けたこの話し合いでは、学級代表が司会となり、係のイベントの計画や補助のお願い、進行にかかわる相談などを話し合う。この会議で話し合われた内容を、リーダーが係活動で伝え、今後の活動の見通しを立てることができるようにした。

(3) PDCAサイクルによる評価活動の実施

活動のマンネリ化を無くし、係同士が常に評価し、刺激を受けられるような活動にしたいと考えた。そこで、P (Plan)・D (Do)・C (Check)・A (Action) のサイクルを活用し、自己評価と他者評価の双方の視点から活動を振り返り、向上を目指すことができるようにした。自己評価の場として、各係には計画書や振り返りカードを綴るためのファイルを用意し、定期的に全員が記入するようにした。また、他者から評価を受ける場として、「係活動評価日」を設け、定期的に活動の良い点や改善点を受けられるようにした。

(4) 「引き継ぎ」を意識した取組

これまでの係活動を振り返ると、例えば1学期に取り組んだ係のノウハウは、2学期に生かされることなく、新しいメンバーで一からやり直し、というものが多かった。単発的な係活動ではなく、次の代へ受け継ぎ、向上していく活動でありたいと願い、係活動に「引き継ぎ」を意識させるようにした。これは、前述のPDCAサイクルに「引き継ぐ・受け継ぐ」の意を表す「Takeover」の「T」を加えPDCA・T (Tはサイクルではなく終点) として活動を行い、終末の目的意識をはっきりともたせることにした。

5 取組の様子

本研究は、H21年度の1年間とH22年度の1学期を合わせ、中・高学年をまたぐ継続的な研究としての取組と組織作りを通しての子どもたちの変容を追ったものである。

(1) 学級代表から係、アルバイトへの「縦」のつながりについて

係の中に「学級代表」ができたことで、子どもたちは「先生とではなくクラスのみんなで係を動かすんだ」という意識が芽生えてきた。初めに意識が変わったのは、係のリーダーである。これまでの対教師で動いていた活動から、学級代表や他の係のリーダーとのつながりができたことで、クラス全体の活動の傾向や取組の様子を把握することができるようになった。また、他の係の工夫点やアイデアを聞くことができたことで、より効率のよい作業の進め方を学ぶことができた。それが自分の係のメンバーに対して的確な指示を送ることにつながり、ひと月ほどで、係活動の時間にふざけたりほうっとして何もせずに座っていたりする姿が全く見られなくなった。

アルバイトについては、開始当初は自分の仕事に手いっぱい、ほとんど活動が見られなかった。しかし、徐々に慣れてくると、リーダー会議で「イベントをやりたいけど人が足りない」「朝の活動の時に誰か手伝ってくれないかな」といった話題があがり、アルバイトをお願いする係が出てきた。アルバイトをする子どもたちにとって、他の係の仕事は情報収集にもなり、「この間、〇〇係がイベントのチラシや参加賞を作っていたよ。ぼくたちも次のイベントの時にやろうよ」といった自分達の活動にも影響を与えるようになってきた。

活動後の自己評価カードからは、「昔は人に言われて仕事をしたけど、今は人に言われずに仕事をやった」「アルバイトがいて助かった」「みんなをまとめるのが上手になった（リーダー）」「みんなが意見を出して決めている」といった意見が見られ、40名近い子どもたちの実に100%が以前と比べて「よくなった」と肯定的な意見を書いていた。また、自己評価の自由記述欄に書かれた内容をグラフ化してみると（表1）、「友達との協力・励まし」がよかった」と答えた子ども約29%であることに次いで、係活動の制度について評価していた子どもが全体の18%であることが分かった。「活動の制度がよいと思った」「他の人と仲良くなれるシステムなのだと思う」といった記述からも、これまで経験してきた係活動と比較してよい活動になったと感じていることが分かった。

このように、学級代表を中心にアルバイトまで「縦」のつながりを深めたことで、一人一人の意識が変わり、誰もが「自分たちの係がクラスを盛り上げる」という気持ちを高めることができた。また、係の仕事の幅が広がったことで、計画性や効率が増し、係のリーダー性も高まってきたと言える。

(2) 「クラスをもっとよくしよう会議」による「横」のつながりについて

係同士のつながりを深めるために始めた「クラスをもっとよくしよう会議」は、初めは朝活動の合間や、休み時間を使って行った。主に話し合われた内容は、以下の通りである。

- ・日頃活動しているの悩みについて
- ・現在進めている活動の状況について
- ・学期末のお楽しみ会の開催について
- ・係活動PR大作戦の開催について

短い時間の中での話し合いのため、必要だと思われる内容にポイントを絞って話し合っていたが、時間の確保が難しいため、学級活動の時間の



写真1 カレンダーに記されたスケジュール

表1 「係活動に対する自己評価」の内訳

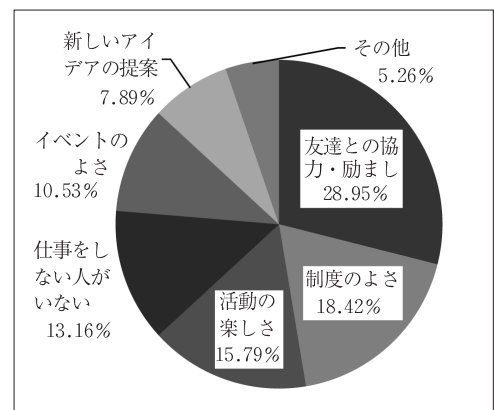


写真2 リーダーの指示で計画的に動く係の子どもたち

初めの5分を利用して行うことになった。その間、リーダーを除く係は、事前に係のリーダーから仕事の指示を受け、活動を進められるようにした。その結果、リーダーは責任をもって活動の計画を立てる必要があることから、回数を重ねるごとに、指示の仕方が的確になり、活動がよりスムーズに進むようになった。

話し合いを進めるうちに、自分の係の事しか話をしなかった子どもからも「一緒にイベントやろうよ」「アンケートってどうやってとったの」といった連帯感のある意見が出され、係を超えたつながりが見られるようになってきた。子どもたちはテレビのコマーシャルや芸能人の話でよく耳にする「コラボレーション(コラボ)」という言葉を使い、複数の係が一緒になってイベントを行ったりする姿が見られるようになってきた。学期末に行われたお楽しみ会では、話し合いの中から「それぞれの係が役割をもって成功させよう」という企画があがり、11ある全ての係が司会やミニイベント、プレゼント作り、お笑い発表会など、役割をもって一つの会を行うことになった。子どもたちは「みんなが楽しめるイベント」を合言葉に、新聞係と飾り係が連携してプログラム作り、お笑い係はミニライブを行うなど、それぞれの係の持ち味を生かした取組を進めていた。

活動の振り返りでは、「みんなでイベントを成功させることができ本当によかった」といった記述が見られ、係を超えた活動のがんばりを認め合うすばらしさを感じ取ることができた。係同士の「横」のつながりを感じることができた一つの成果と言える。

(3) PDCAサイクルによる「斜め」のつながり

「係活動評価日」を設定したことで、自分達の取組を全ての友達から評価してもらうことになり、子どもたちの取組に変化が見えるようになってきた。「常に友達から評価されている」「みんながすごいと言ってもらえるイベントをしたい」といった言葉が聞かれ、他者からの評価に子どもたちの意識が向くようになった。これまで決まった仕事を淡々とこなすだけだった係も、自分達の仕事のよさを知ってもらうため、はきはきと返事をしたり、あいまいになっている仕事の内容を見直したりと工夫するようになった。評価の方法は付箋紙で意見を伝えるKJ法的な手法と、もっともがんばっていたと思う係に投票する方式の二つのやり方で評価した。

飾り係の活動の一例である。子どもたちは、教室の雰囲気明るくしようと、季節や行事に合わせて様々な飾りを作り、掲示してきた。しかし、時間をかけて一生懸命に作ったにもかかわらず、あまり友達から評価されることはなく、悩んでいた。ある評価日、アルバイトをしていた友達の意見の中から、「私も飾りを作りたい」「みんなで飾るイベントをしたら」という記述があった。これまで飾りは自分達が作るものだと思い込んでいた子どもたちは、目を輝かせて相談を始めた。「みんなに雪だるまの飾りを作ってもらおう」「班ごとに作って並べたら楽しいよ」子どもたちから様々な意見が飛び出し、一週間後の昼休み時間に「雪だるまデコレーション」というイベントが行われた。道具の準備や雪だるまの型などは事前に係が用意し、当日はマジックや折り紙などを使い、思い思いの雪だるまを制作していた。「みんなで作った飾り」という意識が友達から認められ、後日行われた投票では、見事上位を勝ち取ることができた。友達の意見によって活動が工夫され、結果、友達に喜んでもらうことにつながったことで、係の子どもたちは、他者評価を受けることのよさに気付いたようであった。

このように、係の中だけでPDCAサイクルを行うのではなく、他の係からの評価を受けられるようにしたことで、リーダーやアルバイトに関係のない相互評価が生まれ、「斜め」のつながりができたととらえる。

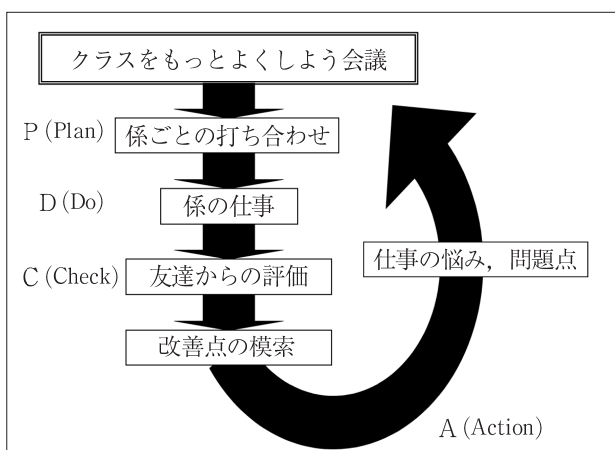


図3 PDCAサイクルによる活動の活性化



写真3 KJ法的手法による活動の評価

(4) 「引き継ぎ」を意識した係活動の試み

学級会やリーダー会議の内容は、学級代表が書記として、全てノートに記録している。また、各係が持っているファイルにも、これまでのイベントの計画書やアンケート、賞状などをすべて綴じるようにしてきた。これらを学期の初めの係活動決めの際に「引き継ぎ資料」として利用し、効率的に作業を進められるようにした。また、学期の初めに「係活動PR大作戦」と名付けた係紹介を行い、その中で、活動初めの悩みについて学級全体で話し合うことで、みんなで係を盛り上げていこうという気持ちを高めることができた。話し合いの中で、「私は一学期に同じ係だったけど、その方法はうまくいかなかったよ。この方法ならうまくいったからどうかな」といった発言が聞かれたことから、改善を加えながら努力してきたことを受け継いで欲しいという願いが伝わったと思われる。



写真4 係活動PR大作戦の様子

6 成果と考察

(1) 振り返りカードによる自己評価から

活動を進めるごとに、子どもたちの係活動に対する意欲が向上しているのが分かった。年度当初、何をしてもよいのか分からずただ座ったり作業の様子を見たりしていただけの子どもたちも、積極的にリーダーに声をかけ、自分の役割を探して取り組む姿が見られるようになった。係活動で子どもたちが教師に尋ねるとき、これまでは「次、何をしたらいいですか」という問いが多かった。しかし、今では「〇〇したいと思うのでこの時間は空いていますか」「今度ライブをやるので見に来てください」といった発言が多いことから、係活動に真に自主的に参加していることが分かる。子どもたちをリーダーとし、子どもたちによる話し合いを進め、評価を繰り返してきたことが、リーダー以外の子どもたちの意欲を高めることにもつながったといえる。振り返りカードの集計結果からも、学級のための係としてみんなで協力して取り組んだことがわかった。(資料1)

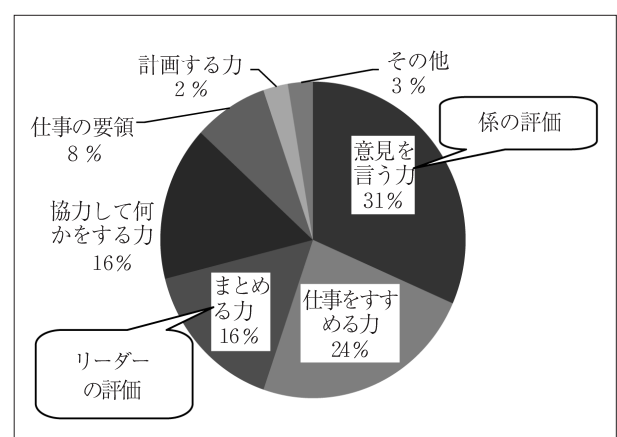
資料1 係活動振り返りカードによる意識調査

	そう思う	少し思う	あまり思わない	まったく思わない
1. クラスのためにがんばった	29人 (76%)	9人 (23%)	0人 (0%)	0人 (0%)
2. 友達と協力して活動した	27人 (71%)	11人 (28%)	0人 (0%)	0人 (0%)
3. 自分の意見を出すことができた	23人 (60%)	15人 (39%)	0人 (0%)	0人 (0%)
4. 活動を楽しんで行った	25人 (65%)	13人 (34%)	0人 (0%)	0人 (0%)
5. 自分なりのアイデアを出した	25人 (65%)	13人 (34%)	0人 (0%)	0人 (0%)

また、係活動を通して自分について力についてアンケートをとった結果(表2)、意見を言う力が全体の31%を占めた。「こういうことをした方がいいんじゃない、こんなことを書いてもらいたいんじゃない、と自分から言えるようになりました」「リーダーが集まって会議をして、それを係で一丸となって実行したことがよかった」といった感想も聞かれた。協力することの大切さや自主的な行動が成果につながるこのよさに気付いた結果であると感じた。

また、リーダーになった子どもたちに特に多かった記述が「まとめる力」が高まったことを示す言葉であり、全体の16%を占める結果となった。それぞれの役割を自覚し、誰もが学級のために努めたことが、アンケートの結果にも表れたのだと考えられ、自主的・自律的な取組の成果といえる。

表2 「活動を通して自分について力」の内訳



子どもの感想から（一部抜粋）

係活動は、自分にとってとてもためになる活動ということがわかりました。

それは、みんなが協力して、みんなで助け合うことが学べたからです。

一学期ごとに係は変わりますが、その1つ1つが心に残っています。

いいこともあります。それは、男女関係なく仲良くなることです。だから、学校には係活動が必要だと思いました。

これからも、自分の役目を見つけてクラスをよくしていこうと思います。

(2) 「縦」「横」「斜め」のつながりと「引き継ぎ」を意識した活動について

本実践では、4つの組織を基盤に活動を行ってきた。係活動を通して、学級代表や係のリーダーを中心に「縦」のつながりを強め、リーダー会議を通して係同士の「横」の関係を強化し、相互評価を通してリーダー、アルバイトに関係なく「斜め」に意見を出し合う。「縦」、「横」、「斜め」それぞれのつながりができたことで、学級に一体感が生まれ、子どもたちで形作る「一枚岩」としての係活動を行うことができた。振り返りやアンケートのデータ、活動に取り組む姿勢からも、各々が自信をもって意見を言える雰囲気ができていることが分かった。また、教師は学級代表を影からサポートし、助言する姿勢を保ったことで、より広い視野で係全体を見取ることができた。子どもたちに自主的な活動を促す取組は、教師自身の時間にゆとりをもつことにもつながり、それぞれの係に十分な評価や支援を与えることもできる。教師の負担を減らすだけでなく、自主性を高める上でも効果があったといえる。

係活動を行う子どもたちの様子を見ると、男女関係なく楽しそうに活動する姿が見られた。活動を進めれば進めるほど、クラスの雰囲気が良くなったと感じた。また、休み時間にイベントの相談や練習をしたり、あれこれ悩みながらアンケートを作ったりと、係活動がきっかけとなってかわりが増える子どもも多くなった。委員会活動で積極的な発言をするようになった子どもの姿からも、研究の有効性をうかがうことができた。

7 今後の課題

(1) リーダー主体から個々の自主性へ

これまでは、クラスの中であえてリーダーをつくり、中心的な立場で物事を指示する事ができるようにしてきた。これにより、活動全体がまとまり、スムーズに進むようになってきた。しかし、これを継続していくと、リーダーになった子どもが絶対的な存在であり、仕事に上下関係が生まれている。これを第一段階とし、今後はさらにリーダー以外の子どもたちが中心となって活躍する機会を設定していく必要がある。また、自主的な活動をさらに促していくため、より効率的な方法を考えていく必要があると感じた。

(2) 係活動から児童会へ

係活動で培ってきた力を委員会やクラブ活動などの児童会活動でどう生かせるのかを今後も調べていく。委員会同士でもつながりをもって活動をすすめることができれば、より自主的・自発的な活動につながるのではないかと考えられる。これまでの経験をどう生かすことができたのかを、継続して調査していきたい。

引用・参考文献

- 1) 国連児童基金（ユニセフ） 『ユニセフ・イノチェンティ研究所Report Card 7研究報告書』
web文書（<http://www.unicef.or.jp/library/pres-bn2007/pdf/rc7-aw3.pdf>） 2007年
- 2) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』 東洋館出版社 2008年
- 3) 齊藤忠之 『学級全体を自主的・自律的集団に高めていく学級活動の工夫』 教育実践研究 第20集 上越教育大学学校教育実践研究センター 2010年
- 4) 橋本定男 『子どもが力をつける話合いの助言』 明治図書 1997年
- 5) 加藤辰雄 『班長を育てる指導』 明治図書 1983年
- 6) 坂本光男・佐藤由紀子 『係のつくりかた・発展のさせかた』 明治図書 1990年
- 7) 春日小学校 『平成21年度 研究のまとめ 心と言葉で伝え愛ver2』 上越市立春日小学校 2010年